

小説の家

福永信 | 編

柴崎友香、岡田利規、山崎ナオコーラ、
最果タヒ、長嶋有、青木淳悟、耕治人、
阿部和重、いしいしんじ、古川日出男、
円城塔、栗原裕一郎

ブックデザイン | 名久井直子

小説とアート、詩、マンガ、演劇の境界を越え、
時空をも超えて生まれた、
ここでしか味わえないスペクタクルな全11篇。
豪華アートワークとともに贈る、

前代未聞のアンソロジー！

A5版・296頁
定価 4,104円(税込)

新潮社

この本はヒホシキヤんの
小説からスタートです。
一度読んでたら
たべれらうれなない
書るまじしてす。

わたしは耳鼻咽喉科に行った。耳鳴りがおさまらな
かったし、寝返りをすると部屋全体が回転するように
感じた。結構前からだからきつと恐ろしい病気などで
はないのだが、時間ができたので来てみた。案の定、
はつきりしたことはわからなかった。

漢方の本で読んだところでは、耳鳴りというのは内
耳に水が溜まっている状態なのだそう。音を聞くこ
ころと平衡感覚を感じるところが同じなのはどうし
て？

わたしは、緑色の階段をぐるぐると下りた。踊り場
の小窓から薄日が差していた。階下から、ぼそぼそと
声が出た。鳥ではなくて、人のようだった。三階から
二階のあいだまで来ると、なにを言っているのか聞き
取れるようになった。

「あ、ほら、晴れてきた。よかったよかった」

鳥と進化／声を聞く 柴崎友香×上條淳士



「もし日本人以外だったら、たとえば欧米人とか、中東とかアフリカとか、インドとか中国とか、いや、とにかく日本人以外だったらなんでもいいかな、みたいな。それだったらアーティストになっても意味あるかとも思いました。いや、なんとなくなんですけどね」
「いやー、でもその変更はちょっと無理ですね」
「そうですか。じゃあ、やっぱり継続は希望しない、ということをお願いします」



女優の魂 岡田利規×佐々木幸子×高橋宗正



そして、ここで、
岡田利規の
小説と演劇が
出会います。

あたしは
ヤクザになりたい

山崎ナオコーラ 絵と文

金と芸術について、本郷は考えていた。すると、頭が痛くなってきた。しかし、一時間ほど考え続けていたら治り、晴れ晴れとした結論が出た。金という概念を持っていて良かった。本郷は睫毛が長く、黒目勝ちで、日本猫のような顔をしている。ぱちぱちとまばたきすれば春の嵐。窓の向こうでは、サラリーマンや女子高生、雑多な人々が行き交う。まばたきという仕草ができて良かった。ずっと目を開けていなければならぬとしたらとても耐えられない、普通に生きていくだけでも眩しくて、しょっちゅう死にたくなくなるのだ。一分ごとに暗闇を垣間見なければ、到底やっていけない。椿屋珈琲店新宿茶寮で、椿屋炭火焼ブレンドを飲み、テーブルの上にスケッチブックを広げ、紙に横顔を付け、本郷は窓を眺めていた。紙の上で、初めは、キャラクターの案を、思いつくままに描き出す作業をしていたのだが、いつのまにか、ペンから出るのは、数字のメモに変わっていた。

数字は予定の収入だった。

これを思うと、「生きていける」という自信が湧いてくるのだった。指をコーヒーに浸してみる。それからくちびるを触ると気持ちいい。手を丸め、五つの爪を均等にくちびるに当てるのは本郷のくせだ。くちびるに当たったときに気持ちよくなる長さに爪を整えるのは大事なことだ。コーヒー茶碗に指をつっこむのははしたないことだが、家でいつもやっているの、つい外でもしてしまった。

この喫茶店の壁際の、ガラスケースの中には、ガラス器が飾ってある。薄赤いコーヒーカップと、薄青い花瓶。高いんだろうな、と想像する。こんな花瓶、もしも家にあったら、自分が倒して壊してしまうことを常に想像しそうで、頭痛が止まらないだろう。ガラスというだけで駄目だ。急にガラスを割りたくなったときに、どうしたらいいのかかわからない。

立ち上がる。背が百四十八センチで体も薄く、普通にしていたら、自信が漲っても迫力はない。そこで、七センチヒールの靴を履いて、やたらと胸を張っているのが本郷だ。髪は短い。全体的に五センチぐらいの長さしかないショートカットだ。

「領収証をお願いします」

と本郷はレジで頼んだ。そして、恋人と、その友人二人と、約束しているタイ料理屋へ向かった。

安っぽい金色の装飾がほどこされた派手な店内に、タイポップが流れている。

草之介は、見るからに草食系男子というものだ。これが本郷の恋人だ。ひょろっと背が

これで
おつりが
きます。
ナオコーラさんの
糸会、ていいな。

きみはPOP

最果タヒ

×佐山太一+Three&Co.×森山智彦

最果タヒは
小説をどこまでも
連ねていく。

口紅を宣伝する看板が、私の頭上で輝いている。ビルのほとんどを占めるぐらいの大きさで、美人が顔をこちらに向けて、笑っていた。私はそいつをめぐってはじめての、引き金を引いたのだ。小さな穴が彼女の皮膚に空いたかもしれない。だれも気づかなかった。それぐらい、足音が大量に鳴り響いていたスクランブル交差点。

私：私が大学時代に入っていたサークルは、小さな小さな宗教団体だった。

信者はOBを含めても30人で、金銭のやりとりはなく、過去問すら手に入りやしなかった。ただ彼らは円盤形の木の板を崇拝し、それらに触れる勇氣すら、忠誠として捧げてしまっていた。だれもそれがなんなのか知らない。30年以上こうやって、一人二人入ってくる新人生とともに奉ってきたのだ。

私は卒業の前夜、サークル棟にしのびこみ、それに触れた。そもそも、崇拜なんてしていなかった。ただの木を崇拝する人間達が面白くて、いつか漫画に描いて一儲けしようと思っただけだ。でも、それなのに、板を前にして手が震える。どうしてかな。わからないけれど円盤を開けたらそこには銃があって、私はもう理由なんて考えるのをやめてしまった。

それから2年、私は歌っていた。小さなライブハウスから始まり、嫌われたり好かれたりしながら、1万人ぐらいのファンを作った。肯定的な批評家に、バックアップしてもらいながら、CDを出して、有名なライブハウスに出してもらって、そろそろスターになれるんじゃないかって、私のことを大好きな人は言うけれど、バカだね。今がピークだって私は知っている。

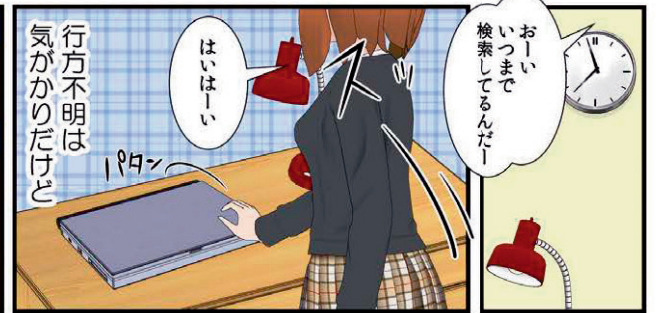
Three & Co.

〈小説〉

フキン^シンちゃん

作 / 長嶋有とダイナマイトプロ

「帰ってきたフキ子ちゃん」の巻





「生存圏」だとして、これを手中に収めんとした。東方に目を向けるとき、そこには将来増大する帝国国民のため、ウクライナの無限の豊作地帯が広がっていた。一方のスターリンはこれほどの大規模作戦の兆候をすべて見逃していた。それにまったく気づかなかったわけではないが、いたずらに国境線を緊張させてドイツに武力行使の口実を与えないよう努めた。「我が闘争」を研究するまでもなく、対独戦争がどうせいつかは避けられない事態だとしても、すぐに戦端が開かれることはないだろうと読み誤っていた。

東部へのドイツ軍集結を警告するチャーチルからの電信は、ソ連を対独戦に引きずり込もうとする英国の陰謀だと見なされた。東京にいた諜報員リヒャルト・ゾルゲからの情報もともに受け取られることはなかった。またスターリンと政府首脳部は、ドイツ側が対ソ戦を準備するには数百万着の毛皮の外套（びょうとう）が必要になると考え、ヨーロッパの毛皮価格の変動を調査させたりもしていたが、短期での勝利を確信するヒトラーが冬支度を怠っていたため価格の急騰は見られなかったのである。

奇襲は成功し、ソ連空軍の約二〇〇〇機は飛行場を飛び立たずして破壊された。制空権を掌握すると、空の支援を得た装甲師団と機械化兵が電撃戦を繰り広げ、ドイツ軍は怒濤の快進撃をつづけた。それは、二つの世界大戦を生きた政治家で名文家でもあるチャーチルが記すところの「スターリンと彼の人民委員たちは、第二次世界大戦中のこの時機において、完全に出し抜かれたへま

言葉がチャーチル 青木淳悟×師岡とおる

な人間であることを自ら示した」ものとなった。

スターリン「……はははよしっ、同志諸君、毛皮価格は比較的安定しているようだぞ！」

その当日夜のラジオ放送で、チャーチルは早くもソ連への援助を表明する。そこでは「敵の敵は味方」といったありふれた表現こそ使われていなかったが、

「……ナチ制度は共産主義の最悪の敵。これを打倒することはできません。それには欲望と人種の支配を断絶し、人間の邪悪のあらゆる形を凌ぐものの一貫して反共主義者として述べた言葉を、しかしすべて……から始まる……けることの必要……従う獣のような」凶……の姿とをそこに描き出し……なく、自由世界のための大義……義的な考えをもつ戦略家で戦史……

青木「ネバーギッファッポー」
福永「ネバーギッファッポー」

案内状

耕治人×福満しげゆき



耕ちゃん（福満さん）、
年の差はけっこう
あるけど、すごく
可愛いよね合ってる。
っつらっつらよ。

鈴子は喫茶店で働いているといつか葉山が云ったことがある。喫茶店で知合った単なる友達か。それとも恋人か。葉山は鈴子のことを話したがらないから、堀が鈴子について知っているのはそれだけである。金を取りに来るくらいだから、いざ親しいことは確かだ。

畑の間を歩きながら堀の頭にそんなことが浮んだ。向うを私鉄の電車が走っている。葉山が売り、鈴子が集金する——奇怪な商売だが、鈴子はなにも知らず、頼まれて来ただけかもしれない。

路地の角から五軒目の、裏木戸を押した。狭い裏庭に向った四畳半が葉山のアトリエ兼寝室だ。

ガラス窓が閉まっている。内側のカーテンが引いてある。朝寝坊の葉山のことだ。二、三度呼んだが、しんとしている。金を待っているはずだ。堀は又呼んだ。家主の未亡人に聞けばわかるだろうが、部屋代はとどこおり、生活は不規則だから、葉山は追立てを喰っている。

堀が裏から来たのは未亡人に会いたくないからである。堀は来たついでに五郎と散歩することにした。五

郎はおとなしい犬で、知らぬ人にも尻尾を振る。垣からこぼれた山吹や紅白のつつじが、美しい。

二

庭で洗濯物を取込んでいた細君に、五郎が吠えた。五郎が吠えるのは家族のものだけである。

「お帰んなさい。さっき大栄堂から本を持ってきましたよ。」

四、五日前、堀は三越に「美の美」展を見に行った。その帰り駅前の大栄堂で、村上華岳画集を注文したのであった。

「お金は払っておきました。」

堀はちよいちよい画集を買うが、細君は小言を云わない。堀の仕事に役立つことを知っている。絵描きになりたくてなれなかった堀を、憐れんでいるようだ。

画集は書齋の机の上にあった。わきに、二、三通の郵便物がある。なかに春陽会の案内状があった。堀は、「おや！」と思い、取上げた。どうしてよこしたのだ

THE I EVES IN THE TEMPLE

阿部和重

一九世紀末期、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ市で創立されたキリスト教系新宗教団体「The Second Coming of Messiah Church」(略称SCM)——同教団の四代目教祖である日系アメリカ人三世ジョージ・ミツミネがその生涯を終えたのは、二〇一二年三月二〇日火曜日の午後五時四五分のことだった。享年七〇。

ジョージ・ミツミネは、一日に五回以上の射精をおこなわないと寝つきが悪くなり、六時間おきに必須アミノ酸を摂らないと二四時間ぶっ通しで眠りこけてしまうという奇病を長らく患っていた。二一歳で発症して以来、そんな病気にかかってしまった自分自身を深く恥じていたミツミネは、催した際は周囲に悟られぬよう瞑想と称して専用の小部屋にひとり閉じこもり、

いつも内々に処理してきたのだった。ヘイト・アシュベリーの開業医ドクター・ロバートは、若い時分に得た唯一の相談相手だったが、しかし彼の言葉はどれも耳触りがいいだけのペテンにすぎないと、やがてミツミネは気づいてしまう。すっかり失望し、ただちにドクターと手を切ったミツミネは、しばらくはキャンドルステイック・パークに通いつめて好きでもないジャイアンツの試合を観戦し、たまにマウンドで見かけるマッシー・ムラカミの登板にわずかな喜びをおぼえることしかできなくなる。医学の助けを受ける気持ちも失ってしまった彼は、その後は信仰以外なにもすがらずに生き、栄養管理を怠らず毎日五回以上の射精をおこなうことを密かな習慣にしてすごした。それを何年ものあいだ、ミツミネは日課としてきたのだったが、そういう彼でも、年を重ねるにつれて射精の回数維持するのが難しくなっていた。老境にさしかかると、ノルマをこなせない日のほうが増えてゆき、寝不足を恐れるあまり彼は、必須アミノ酸の摂取をわざとやめてしまうこともあった。寝不足は健康ぶっ通しの睡眠も、身体への悪影響という点ではおなじことだった。には、心身ともに彼は著しく衰弱し、信徒らの前に姿をあらわすまっていた。

晩年はそんなふうだったミツミネは、最後の半年間は半ば寝たきりレビのトーク番組や映画のDVDを鑑賞するばかりの生活を送っていた。そして死去する前夜、彼は大変に示唆的な色つきの夢を見る。その夢の内容は、教祖の遺言として、ミツミネ自身の口から教団幹部

今一冊で、
阿部和重の
小説は映画と、
最終接近して来た
と思っ。

※実際には全てが透明インキで印刷されています！

ろば奴

いししんじ
絵いししひとひ

こう見えてわたしは、わりと大きな屋敷で生まれ、みなにかわいがられて育ったものでございます。讃岐の国の浜の、遠くに近くに潮鳴りがひびいてくる村で、わたしの家はもう八代にわたって塩をあつかうもとじめをやっております。讃岐の塩田は、ごぞんじとはおもいますが幕府ちよつかつのいわゆる「てんりょう」で、なかでもわたしの村の塩は「たまり塩」という独特の製造法でしられ、その一帯でもおおいにはぶりがよろしゅうございました。父は片目でした。若いおんなにその穴を見せては、上にのしかかるような男

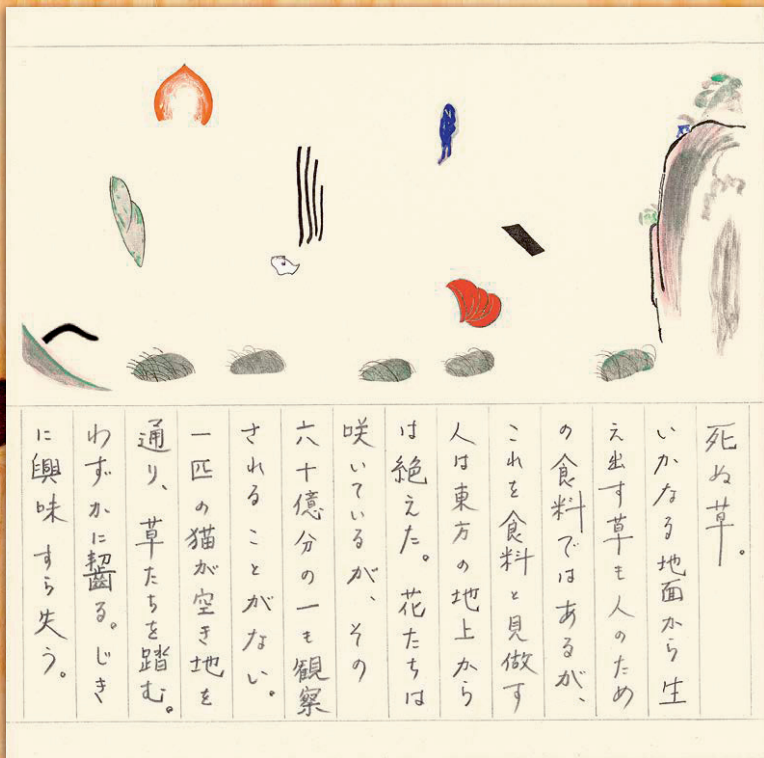
でした。「たまり塩」とは地面に穴をほり、塩をつめた俵をおろし、土をかけ、何年も何年もねかせ、そうすると独特の「おもみ」ともいいますか、舌に塩のつぶが「たまる」感じのあじわいがあるのでございます。わたしは、父が酔って申しましたことには、その屋敷で十二番目の子どもで、あたまのはったつがおそい上から、だにとくちょうがあつたにもかかわらず、ゴロウ、ゴロウ、と玉をころがすような声でみなによばれました。なかでもオンネエサマの声はこがねいろのチョウがとんでくるようでした。

わたしには、なまえがわかるだけで、きょうだい二十五人ほどおりました。屋敷には十いくつハナレがあつて、そこいらで子どもが釣り竿をかついだり、取っ組み合ったり、にぎりめしをほおぼっていたりし、わたしたちは村のものたちから、「磯」と「五十」のかけことばで、「いそのきょうだい」などと呼ばれておりました。五十、というのは、讃岐は子だくさんの家が割合におおございますが、しょうしょうおおげさすぎるようにおもいます。そうして、どうぶつのがたがございました。讃岐のにんげんは、おだいしさまがいらっしやうて以来、どうぶつと深いかかわりをもつてくらしっております。かちくというよりもかぞく、いや、ごせんごのこんじょうの姿として、犬や猫、豚まで、家でもにおきふしするにんげんがいるかと思えば、鳥、魚、虫と、見かけたらすべて、とにかくみつぶす、ひねりころす、といったにんげんもおります。屋敷にも、たくさんのどうぶつがすんでおりました。ひろい敷地のなかを、ただ気ままに、ゆるゆる往來しているでございます。犬はくるくると尾を追っ

て駆け、牛はとろんとした目で砂地をふんでゆきます。姉のひとり山から綿羊をつれてかえり、わたしに、外つ国風の長着をあんでくれました。屋敷のろうかにはひとでやざりがにが砂絵のようにちらばっていました。村のにんげんがヒシヤクをふって働く塩田の浜で、きょうだいでにぎりめしをほおぼってゾウのきょうだいを眺めました。それぞれが、じぶんに似ているどうぶつがいると、おそらくかんでおりました。どうぶつも屋敷に五十しゆるいほどこいたかもしれませぬ。

わたしたち「いそのきょうだい」は、ぜんいん、オンネエサマの子でございます。なま、誰がどうぶつうこんぐらがつておだひとりでございます。にたつ、オンネエサマで、ぜんたいがかがくらしいあさせの夜光はっし、月明かりのす。ひとばんに何人か

いししんの小説は、
途中から、
小説であることを
超えていく、
たとえば「こんだぶ、うい」。



死ぬ草。
 いかなる地面から生
 え出す草も人のため
 の食料ではあるが、
 これを食料と見做す
 人は東方の地上から
 は絶えた。花たちは
 咲いているが、その
 六十億分の一を観察
 されることがない。
 一匹の猫が空き地を
 通り、草たちを踏む。
 わずかに齧る。じま
 に興味すら失う。

画題は『死ぬ草』だった。そのフレーズには予言性が孕まれている。しかしながら描かれている草はすべてに死んでいるのではなからうか。作品を数秒間ばかり凝視すればわかるのだが、草とは大地の毛である。ならば大地とは何者かの皮膚に相当している。われわれは内臓に毛が生えるという事例を知らない。すなわち内側に隠匿されるものは贅毛せず、外側にさらされる部位のみが毛によって防御を行なうのだ。その防御のシステムのための毛に相当するところの草が、作品内ですでに死んでいるように感じられるとしたら、東方には大なる予言者が『死ぬ草』。一点で降臨したのだとも言える。推断でまよる。いずれにしても脊椎動物の姿はここにはない。

最初にこれらのことを断言しなければならぬ。「絵は、観られなければ絵にならないし、文は、読まれなければ文にならない」と。私は何を言わんとしているのか？ すなわち鑑賞者でもいいし読者でもいいのだが、そうした受け手が存在しないところには、結局は絵画も文章も存在し得ないだろう、との厳然たる事実だ。おまげに描かれる絵画、あるいは書かれる文字は、できるかぎり多数の受け手を求めようとする。一人よりは三人、三人よりは三十人、わずかに一点の絵画であっても三百人から三千人、三万人の目を求めるだろう。受け手たち。だが問題は「かつては観られたが、いまは観られない絵は、いったんは絵であることを停止していたと解釈するのが妥当である」の否かだ。こんな問いを突きつけられるとは思わなかった。私はまるっきり予期していなかったし、私以外の調査隊のメンバーも同様だろう。私たちはこんなものを発掘してよいのか？ もちろんよいのだ。私たちは砂中より現われた美術館に『ブッダの頭蓋骨』を与えた。この命名に反対したメンバーはいない。しかし不思議なことなのだが、この名を候補として挙げたのか、それが記憶にないのだ。当然だが記録にない。もしかしたら『ブッダの頭蓋骨』を口にした瞬間に口をついたので、私自身が言ったとは認識し、適切な名称であるならば、実際にこの美しき死を、ろん私たちは遺跡の内部に泊まっていた。ク（一種の概念としてのビパーク）を、に駆動されて館内を彷徨った。廊下から廊下も、あるいは天井にも、生命の痕跡がまるでない。

古川日出男は
 声を大きく。

凶説東方恐怖譚

古川日出男 × 近藤恵介

手帖から発見された手記 円城塔×倉田タカシ

動いているように見える。いや、絶対、動いているでしょ、この小説。ね？、円城さん。

最近、地球自体に加工をするのも流行だ。海底に戦艦を配置してから、海を干上がらせてみたりする。地球の周りに環をあしらって、気取ってみせる。太平洋にナイフを突き立て、大西洋にフォークを刺してみたりする。静止軌道に届くくらいの。

そんな作品を支える技術は、物質の底で涅槃の夢を見続けている失敗宇宙の性質を利用してみたいものである。

巨大な爆発の形をとった手帖の発掘作業により甚大な被害を蒙った人類だったが、まあ、そんな事件

そんな非難の声は、日々大きくなるものになってきている。

芸術と呼ぶには稚拙にすぎるということだが、制作側からの反論というものは特にない。

軌道作品に関わる者たちは、地球の再建作業が終わり、もて余した工具群で暇を潰しているだけなのだから、それが芸術なのかどうか、知ったことではないのである。少なくとも表向きだけ。

「どうなのかしら」

妻は、建設のはじまったアルファ・ケンタウリ向け人間大砲のニュースに眉をひそめて、指編みを止める。

褒められた趣味ではないねと返答しながら、わたしは軌道作品の背後に蠢き続ける、膨大な機械の群を、機巧の集まりを想像

している妻に、無駄なメッセイヤーで繋

からでも、ものだ。極微かな大工た地球をんな道具のった。小さなハンマーが中

何割かは生還したりするから極大までを順に繋いだ、膨大な機械の群。地殻の破れたを再建するには、そんな集積が要

「ただ巨大だけではないか」
中からのお役人にかがいがいを立て、中からのお役人は大きなお役人にかがいがいを立て、そんな過程がどこまで続いて許可されたのか、現場監督は誇らしげに許可証を見せるわけである。それを偽物と断定するには、まず小さなお巡りさんに通報をして、という過程が必要となる。

している。軌道作品を芸術と呼ぶ気はあまり起こらない。しかしそれを可能と

